

気候変動の適応事例／境町長 「推進員第1回スキルアップ研修会」



11月18日にホテルレイクビュー水戸において2020年度茨城県地球温暖化防止活動推進員第1回スキルアップ研修会を開催しました。この研修会は、推進員第1回及び第2回全体研修会に続くもので、活発な意見交換をとおした情報共有と推進員の皆様のスキルアップを目的としたものです。市町村職員を含め約80名の参加で開催しました。

また、各地域地球温暖化防止活動推進センターや推進員の皆様へ、研修会の模様をZoom配信しました。



第1部 気候変動

講演「気候変動に対応する自治体の役割～適応策としての防災対策～」

境町長 橋本 正裕 氏

積極的に防災対策に取り組んでいる境町の各種対策を紹介していただきました。

最初に、激しい気象変動と近年の災害の紹介があり、平成27年関東・東北豪雨では、町の10%が冠水し、染谷川の越水、宮戸川決壊等により甚大な被害が発生し、死者1名、負傷者3名、被害総額も約20億円に達したとの説明がありました。

令和元年10月12日には、台風19号による利根川氾濫の危機の際に、全国初となる町外への「広域避難」を実施しました。町の災害リスクとして、国のシミュレーション結果では、町が手を尽くしても500人が逃げ遅れ、また、利根川氾濫時には最大で町の95%が浸水してしまうそうです。

続いて、激しい気象変動下の町の取り組みの紹介がありました。ハード面の整備では、平成30年に日本初の水害避難タワーを設置、約200人が一時的に収容可能で、庁



舎と連結することにより、約 1,000 人の避難場所として運用可能です。また、災害時移動可能なコンテナハウス 12m（機能別）を 4 台、6 m（宿泊用）を 8 台保有。移動式宿泊施設ホテルスタンバイリーグさかいは 12m型コンテナハウスを 32 台合棟して建設するものです。今年度から C R T 移動式木造建築住宅を導入、さらに、水素ステーション・水素自動車も導入済で、地球温暖化対策にも貢献しているそうです。

ソフト面では、「防災アドバイザーに片田特任教授（東京大学大学院情報学環）をお迎えして様々な事業を展開していることの紹介がありました。

最後に、全国的な連携として、ふるさと納税を利用した被災地支援として、ふるさと納税型 G クラウドファンディング、ふるさと納税代理受付、被災地支援パートナーシップの説明がありました。

なお、新型コロナウイルスの感染拡大の影響により、急遽リモートによる講演となりました。聞きとりづらい場面がありましたが今後改善していきたいと思います。

第 2 部 S D G s 地域循環共生圏

講演「ローカル S D G s の推進に向けて」

環境省関東地方環境事務所 地域循環共生圏構想推進室長 速水 香奈 氏

2015 年 9 月「持続可能な開発のための 2030 アジェンダ」が採択され、同年 12 月に「パリ協定」が採択された。時代の転換点であり、新たな文明社会を目指し、大きく考え方を転換（パラダイムシフト）していくことが必要である。また、我が国が抱える環境・経済・社会の課題の同時解決を、相互に関連し・複雑化しているこの 3 分野の統合的向上が求められると話されていました。



そして、第五次環境基本計画の基本的方向性の一つに「地域循環共生圏」の創造が挙げられており、その一つの対策として、R 2 地域循環共生圏づくりプラットフォームの構築に向けた地域循環共生圏の創造に取り組む活動団体等（計 32 団体）のうち、佐賀県鹿島市、神奈川県小田原市、福岡県みやま市、千葉県睦沢市、栃木県宇都宮市、日光市の取組の紹介がありました。

次に、地域循環共生圏の創出に向けた E S G 地域金融の普及促進の説明がありました。間接金融中心の我が国では E S G 融資の拡大が重要で、特に地域金融機関による E S G 地域金融の普及を支援するものです。具体的に、中・南九州地域における地域循環共生圏の取組の紹介がありました。

最後に、地域循環共生圏を支える「つなげよう、支えよう森里川海」プロジェクトの説明がありました。このプロジェクトは、生活者目線で地域循環共生圏を広げる運動で、一人一人、一社一社のライフスタイルシフトが基盤になるということでした。

なお、地域循環共生圏構想推進室は、関東及び九州地方環境事務所に今年 5 月に新たに設置された部署です。

第3部 SDGs推進事例とワークショップ

講演「リモート開催によるSDGsの推進事例について」

世界環境サミット 事務局長 秋山 義紀 氏

新型コロナウイルスの影響で、2020年3月以降、人の動きモノの動きが世界中で止まってしまい、様々なイベントがキャンセルされ、大規模コンベンションホールもイベントが中止されました。そこで、リアルな展示会であれば感染の問題で厳しい状況ですが、大規模展示会を自宅でも参加できるネット上で行おうと立ち上がったグループが「世界環境サミット実行委員会」です。



インターネット上で展示会をしてしまおうという大胆な取り組みで、4月29日から5月1日までの3日間、「世界環境サミット in SDGs Virtual City」と題し、オンラインのシステムであるYouTube LiveやZoomを使って各ブースから発信しました。また、HPは作っただけでは駄目でいかに使ってもらえるかが重要であると話されていました。配信の不手際もありましたが、Facebookを活用し、たくさんのグループが立ち上がっているということです。第2回は、8月27日から3日間、中高大学生を対象とした「世界環境学生サミット」を同時開催。世界5か国・全国地方から27名の学生が参加し、10分間は長いため各自7分間の発表を行いました。オンラインでは盛り下がりやすいため、好きな食べ物や共通点探しのアイスブレイクを取り入れると良いようです。また、第2回は、障がい者や子育て、地方の方々がいかなくても見られるリアルとバーチャルのハイブリットへと進展したそうです。

12月23日～24日開催の第3回世界環境サミット（4頁をご覧ください）では、制度を高めたリモート開催にすべく準備を進めていると話されていました。

ワークショップ「オリジナルSDGsの推進に向けてバッチを作ろう」

茨城県地球温暖化防止活動推進員グループ econet いばらきの皆様

econet いばらき代表の伊藤三男氏による缶バッチの説明の後、グループ員の指導を受けながら、参加者一人一人が缶バッチ作りを体験し、作成した缶バッチは各自持ち帰ってもらいました。参加者からは、缶バッチ作製機を温暖化センターで購入して、推進員へ貸し出して欲しいなどの要望が出ていました。

